

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2025 夏 vol.153

特集

観峰館 開館30周年
新館オープン10周年

私の出版体験

『村方文書にみる
江戸時代庶民のくらし』

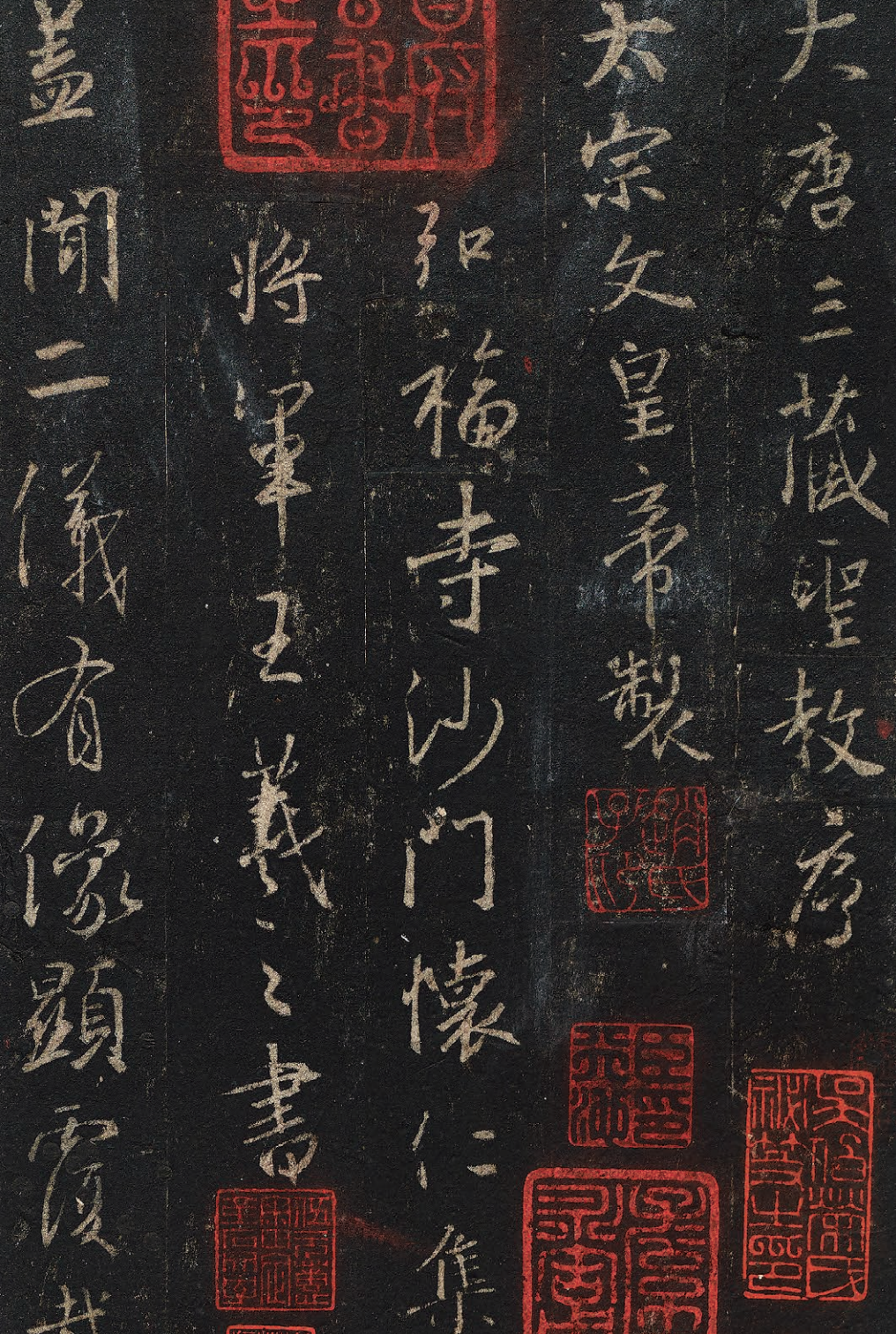
INFORMATION STATION

催し案内 2025 夏

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内



左が6階建ての本館、右が原田観峰記念室、
手前が硯池

特集

観峰館 開館30周年・ 新館オープン10周年



東近江市にある“書の文化にふれる博物館”^{かんぼうかん}観峰館が、今年10月で開館30周年を迎えます。20周年の際に新設された特別展示室の10年と、創立者・原田観峰^{かんぼう}氏の書を改めて見つめる「原田観峰の書法展」、特別企画展「王羲之^{おうぎし}からの手紙」の見どころをお聞きしました。

特別展示室がある新館入口



観峰館

住 所 東近江市五箇荘竜田町136

連 絡 先 TEL 0748(48)4141 FAX 0748(48)5475

休 館 日 月曜日(ただし、祝日の場合は翌日)

入 館 料 一般1000円、高校生・学生800円、中学生以下無料
特別企画展は展覧会ごとに料金が異なります。※各種割引あり

駐 車 場 80台

アクセス JR 琵琶湖線「能登川駅」から近江バス「八日市駅」行きで金堂竜田口下車徒歩15分、または近江鉄道「五箇荘駅」から徒歩10分(「能登川駅」からタクシー利用の場合は約10分)／名神高速道路「彦根IC」または「竜王IC」から約16km

取材／編集部 写真／辻村耕司

企画展のテーマが多彩になり、 来館いただく対象も広がったと思います。

地域との連携で古墳の出土品まで広がった企画展

——最初にオープンから10年が経過した新館の特別展示室についてお話しただけですか。

瀬川 平成27年（2015）にオープンした新館内の特別展示室は、文化庁の指標に沿ったかたちで、温度や湿度、照明などを管理できる展示環境となっています。それ以前は館所蔵のコレクションだけを公開する企画展となっていました。他館の所蔵品を借用して展示することができるようになりました。それだけ責任は重くなりましたが、

同年10月の新館オープンの第一弾が、特別企画展「華麗なる清朝後期の書画」ラース

トエンペラー

の時代」でした。この時、東京国立博物館蔵の愛新覚羅溥儀の書などを展示しました。

——重要文化財級のものも展示できるようになったということですね。

瀬川 平成28年（2016）9月の特別企画展「開山寂室元光禅師650年遠諱 永源寺に伝わる書画」では、東近江市にある永源寺の文化財を展示させていただきました。永源寺蔵で重要文化財に指定されている寂室元光の墨跡などです。

それまでは中国の作品がメインでしたが、こうした日本の作品が展示できることで企画展のテーマが多彩になり、来館いただく対象も広がったと思います。

2016年2月の冬季企画展「生誕180年 鉄斎 齋登場！」では、ファンの多い富岡鉄斎を取り上げました。

——地域と連携した企画展も増えていきます



※1 愛新覚羅溥儀（1906～1967）清朝最後（第12代）の皇帝。辛亥革命で退位し、満州事変後、日本に擁立されて満州国皇帝となり、康德帝と称された。

※2 寂室元光（1290～1367）臨済宗の僧。美作国（岡山県）生まれ。近江国守護六角氏頼の帰依を得て、永源寺を開山。

※3 雪野山古墳 雪野山（標高309m）の山頂にある前方後円墳。国の史跡に指定。

したね。本誌の催し案内のページでは滋賀関連の展示会を優先させているので、中国書画を題材とした観峰館さんの企画展はあまり紹介しなかったのですが、掲載が増えしていきます。

古橋 地域連携という意味で印象深いのは、2018年9月の秋季特別企画展「雪野山古墳の全貌」ですね。平成元年（1989）に未盗掘の状態で見つかった巨大な前方後円墳から三角縁神獣鏡などの銅鏡5面、漆製品34点をはじめ、銅鏃や鉄製品が大量に見つかり、平成13年（2001）に一括して重要文化財に指定されました。

出土品は東近江市埋蔵文化財センターが保管しており、隣接する東近江市能登川博物館で一部ずつ公開されることはあったのですが、すべてをまとめて展示することができた館が市内にはありませんでした。

それで、観峰館が新館をオープンさせたというので白羽の矢が立って、副葬品を一堂に会して市民の皆さんに公開する機会になりました。考古学の研究者による講演もあり、従来とは異なる層に来館いただけたと思います。

——チラシを見た時は、なぜ考古学系の企画展を観峰館でやるのかなと不思議な感じ



観峰館 学芸員
古橋慶三さん

ふるはし・けいぞう／1961年、大阪府生まれ。



観峰館 学芸員
瀬川敬也さん

せがわ・たかや／1969年、兵庫県生まれ。

がしたので覚えています。

瀬川 市内関係では、2017年9月の秋季特別企画展「近江商人・野口家十一屋コレクション展」も印象に残っています。

現在の山梨県甲府市で醸造業を営んでいた近江商人・野口家の4代目当主・野口正忠（柿郎）は美術愛好家として知られ、コレクションは山梨県立美術館に寄贈されています。それらの里帰りというかたちで、息子の妻にあたる画家・野口小蘋の作品をはじめとする書画を展示しました。



古橋 地元出身の人物という点、令和2年（2020）2月の冬季企画展「東近江出身の仏絵師 藤野正観の仕事展」もよく覚えていました。

地元企業である藤野商事の社長・藤野滋さんはよくこま館にたどく方なのですが、正観さんのご親戚のご提案いただいたのが始まりです。

2020
年末からのコ



——地域との連携以外で、新館オープンによる変化はございましたか。

瀬川 当館が収蔵するコレクションは中国の書画が主ですので、それらを切り口にした展覧会が多いのですが、例えば山水画や花鳥画の展覧会を開催する場合も、館蔵品だけだと清代以降の新しい時代のものに偏ってしまっていました。他館からの借用資料を交えることで、中国の王朝でい

口ナ禍の影響で講演会が中止などの影響はあったそうですが、来館者の方には好評だったようですね。

古橋 その前年（2019）2月の冬季企画展「平山郁夫——引き寄せられた中国書画」は、当時当館にいた学芸員が鎌倉にある平山郁夫美術館の学芸員と知り合いだったことから実現したものです。

瀬川 敦煌などを訪れて文化財の保護修復活動をしていた平山が、中国の書画家と交流する中で贈られた大量の作品を初公開させていたただく場となりました。



当館は書画が専門ということで、展示ケースの設計も、立体物を展示しやすい構造になっておらず壁面とガラス面が近いことが特徴です。そのため、掛け軸などを掛けたときに、作品を近くで見ることができず、「落款印の文字までよく見える」と鑑賞の面でもご好評をいただいています。また、展示室自体はそれほど広くありませんが、一つのテーマをゆっくり見てもらえるので、「おなかいっぱいになりすぎない、ちょうどよい量」と言っていただけです。

関西の中国書画を所蔵する博物館・美術館とも協力

宋代くらい、およそ1000年前の作品から歴史を追う構成も可能になりました。

古橋 当館は、関西の博物館や美術館の学芸員が中心に活動している「関西中国書画コレクション研究会」に平成22年（2010）の設立時から参加していて、それらの館と連携があるので、所蔵なさっている重要文化財などをお借りすることで、時代の幅をつけることができるようになり

関西中国書画コレクション研究会

参加館	所在地
京都国立博物館	京都市
泉屋博古館	京都市
藤井育成会有鄰館	京都市
大阪市立美術館	大阪市
澄 懷堂美術館	三重県四日市市
黒川古文化研究所	兵庫県西宮市
大和文華館	奈良市
観峰館	滋賀県東近江市
和泉市久保堅記念美術館	大阪府和泉市
兵庫県立美術館	兵庫県神戸市

※4 野口正忠

（1822～1892）江戸時代に甲斐国で酒と醤油の醸造業を起こして繁栄した野口家（屋号・十屋）の4代目当主。

※5

内藤湖南（1866～1934）秋田県生まれの東洋史学者。本名、虎次郎。

ました。

——関西の博物館・美術館は中国書画に強いと聞いたことがあります。何か経緯があるのですか。

瀬川 明治末から大正にかけて京都帝国大学の教授に内藤湖南という人がいました。当時、辛亥革命などによって中国本土の貴重な史料が海外に散逸しかけたのを知った内藤は、それらを日本人がコレクションする道筋をつけたんです。

古橋 内藤と親交のあった関西の財界人が収集したものを博物館に寄贈したり、独自に一般に公開するために博物館を建設したりしました。

瀬川 そうした財界人には滋賀県出身者、いわゆる近江商人もいました。大阪市立美術館に寄贈されたのは、彦根出身で東洋紡績（現、東洋紡）の社長などを務めた阿部房次郎のコレクション、藤井育成会有鄰館は、五個荘（現、東近江市）出身の藤井善

助が自身の中国古美術コレクションを一般に公開する目的で建設したものです。この人は、ひしやう東近江市宮^{みやしろ}荘町にある近江商人屋敷藤井彦四郎邸の彦四郎の兄にあたります。
 今後もうつしたネットワークを使って、いろいろな企画展ができそうですか。
 瀬川 中国書画はどうしても、ヨーロッパ

夏季企画展「没後30年 原田観峰の書法展」 開催中 9月15日

詳細は催し案内(10ページ)を参照

今も使われ続けている観峰作のお手本

——夏季企画展「没後30年 原田観峰の書法展」について、ご担当の古橋学芸員から見どころをお話しいただけますか。

古橋 当館は創立者である原田観峰が亡くなった年にオープンしたので、開館と同じく没後30年にあたります。これまでに何度か観峰の書の展示はしてきたのですが、これまであまり出していない作品、特に日本習字のお手本として現在まで使われ続けているものも含めた展示は初めてとなります。日本習字の生徒さんにとっては見慣れた書風なのですが、これまではそれ以外のものを中心に展示していたんです。

——戦後まもなくに習字の通信教育事業を始めた創立者の経歴については、開館20周年の際の取材でもお聞きしました。

古橋 例えば、製造業や飲食店では、製品のコンセプトやメニューに載っている料理の味がずっと変わらなければ、「あそこの品物はいい」と認識されて、繁盛しますよね。その意味で、日本習字教育財団の商品は観峰が残したお手本なんです。もちろん、実際に教えているのはそれぞれの教室の先生方ですが。

の絵画・彫刻などの美術作品と比べるとあまりメジャーな分野ではありません。これは研究会設立の目的でもあるのですが、それぞれの館がバラバラにやっていたのは限界があるので、みんなでタッグを組んで普及につなげる活動をしたいと思っています。

添削指導では、1か月の課題を子どもたちが書いて、京都や福岡の本部に送ると、添削指導者が赤字で添削して返却します。このお手本は、観峰が亡くなって30年経つ現在もずっと使い続けられています。それだけ商品力があつたのだと思いますが、まずこれがなかなかすごいことだと思っています。

——古びない、時流に左右されない手本なのでしょうね。

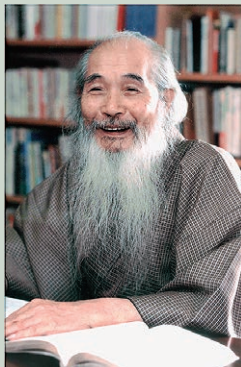
古橋 観峰は、毎月、幼児から小学校6年生までの各学年向け、中学生向け、大人向けと、十何種ものお手本を作成しており、その中学生向けと漢字部(大人が漢字を勉強するためのお手本)の表紙に、標語的な文章をいろいろ書いていました。

例えば、「大きなものを手に入れたためには、小さいものを手放さないとけない」とか、「普段気がついていないことが、本当は大事なことだ」といった短い文章で、日本習字では「訓語」と呼ばれています。必ずしも押しつけがましい文章ではなくて、気づきを与えるような内容になっています。中学生向けのものの場合だと、思春期に

※6 阿部房次郎(1868〜1937) 彦根生まれの実業家。東洋紡績社長をはじめ関西経済界の要職を歴任。

※7 藤井善助(4代目)(1873〜1943) 神崎郡宮荘村(現、東近江市)生まれの実業家・政治家。大阪金巾製織など多数の企業の社長を務め、衆議院議員3期在任。

日本習字創立者
原田観峰(1911〜1995)

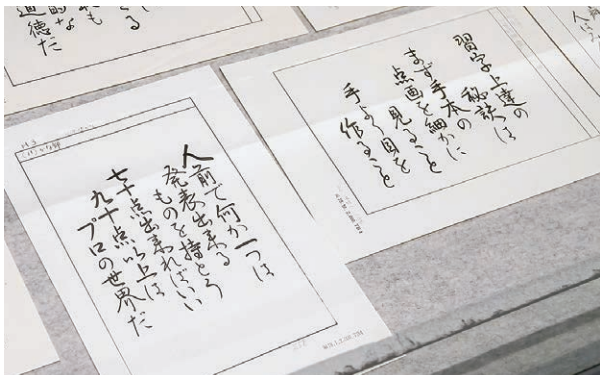


本名…孝太郎。福岡県生まれ。昭和28年(1953)、「正しい美しい愛の習字」を提唱して、習字の通信教育事業を興し、全国規模で書道教育を展開。30年の歳月をかけて収集した書道資料などを展示公開する博物館(観峰館)を、平成7年(1995)に開館。

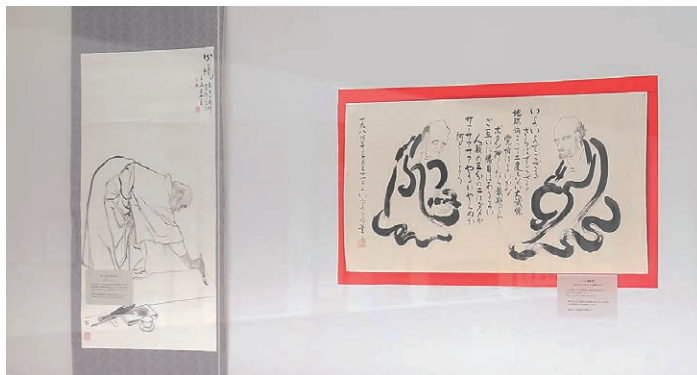
あたる年齢ですから、「ちよつと自分の内面を見つめてみましょう」といった、生徒側の記憶にも残りそうな言葉もあります。

——観峰の思想に目を向けるということでしょうか。

古橋 「思想」とまで言うとは大きくなりました。今回の企画展に関する広報でもそういう言い方はしていません。観峰は生前、信仰についていろいろと考えたこともあって、自分の身近な、直接の実技指導をしている生徒さんには、人を育てるうえで的心得という面で伝えていました。ただ、現在の日本習字では、観峰の信仰面などについて前面に出すようなことはありません。



↑観峰が書いた指導用の手本
(特別展示室内の展示を撮影)



↑王西京画「原田観峰先生肖像」(左)と原田観峰「二人達磨問答」(右)
(特別展示室内の展示を撮影)

今も80〜90歳のご高齢で教室を開いてくださっている先生方の中には、観峰から直接指導を受けて、そうした考え方の面をよく理解しておられる方がいらっしやいます。もちろん観峰の文字、お手本が大好きだからというのが第一でしょうが、当然、観峰の人柄や会って交わした言葉は、先生方の中にいまだに生きているのだらうと思います。

——私も顔写真しか知らないわけですが、どんな人だったのかという興味はわくお顔ですね。

古橋 生徒部と呼んでいる小学生、中学生の生徒さんにとっては、自分が生まれる20年ほど前に亡くなっている、長い白い髭をはやしたおじいさんというのは、本当におとぎ話の中の存在のようなものだろうと思います。ですから、教室で教えておられる先生方に子どもたちのほうから、「観峰先生は、どんな人だったの？」という質問

があったりするそうです。ところが、現在は教室にいる先生の方が40代、50代で、実際には観峰に会ったことがない人がほとんどになってきました。

財団としては、これまでと同様、「観峰はこういう人だ」「こんなことを言っていた」という思想を前面に出すようなことは無いと思うのですが、その一部を改めてお手本を展示することで示せればと思います。

——お手本を読めば、観峰さんの人となり、が少しは見えてくるでしょうと。

古橋 訓語の内容について、わざわざ他の人が注釈を加えてふくらませなくても、「この言葉そのものが観峰だよ」と、それぞれに感じていただければと思っています。

ですから、解説的なことは、オンライン配信による土曜講座やインスタグラムのライブなどで紹介するときお話しするだけにとどめ、文字としては残らないかたちにしようと考えています。

数少ない晩年の作品に現れる観峰の姿

——展示される作品には、お手本とは別到大作と呼びたい作品もありますね。

古橋 ここまでお話ししたように観峰はお手本を書く人でもあったので、生徒さんからすると、「観峰先生が書いたものは全部お手本」になってしまうわけです。最初はやはり書家としての自負もあり、才能もあつたので、そうした作品もたくさん書いていたのですが、だんだん晩年になると、会員も増えて、創作にあてる時間がなくなつたうえに、自分が書いたものは全部お手本になつてしまうので、独自性のある作品としての書を書けなくなった面があります。

——なるほど。

古橋 それでも、いくつかは残されています。特に今回、大きな作品で興味深かった

のは、ダルマさんのような二人が並んでいるので、「二人達磨問答」とタイトルをつけた作品です。書いてある文字も非常にお手本になる文字で書いてありますが、内容がちよつと怖い。最近まで、こんな作品を書いていたとは知りませんでした。

——米ソの冷戦下での核戦争の危機についての書ですね。

古橋 そうです。昭和59年(1984)3月今から41年前に第三次世界大戦が起こりそうだと、どうするんだみたいなことを書いています。現在の2025年にこれを見ても、ウクライナとロシアやイランとイスラエルの間で同じような状況があるので、現代がかかえる矛盾や世界の平和について考える機会になればと思います。

開館30周年特別企画展「王羲之からの手紙」

10月1日～10月26日

詳細は催し案内（11ページ）を参照

王羲之に加え、宋代の書家3人もそろい踏み

少し早いのですが、秋に開催の特別企画展「王羲之からの手紙」についてご担当の瀬川学芸員にお話をお聞きます。今回、初めて国宝が来るそうですね。

瀬川 はい。重要文化財は何度か展示しているのですが、国宝は初で、王羲之「孔侍中帖」が来ます。

当館のコンセプトが「書の文化にふれる博物館」で、日本習字という書の団体が運営している博物館ですので、30周年を機に原点に立ち返るという意味で企画した展覧会です。王羲之は、書の世界ではとびきり知名度が高い人物ですし。

名前だけは聞いたことがあります。簡単に言うとういった人物なのですか。

瀬川 書というものを単なる実用の手段ではなくて、芸術のレベルに引き上げた人と言えるかと思います。

素人目で見ると、普通の漢字だな、よく見る書と感じるのですが。

瀬川 皆さん、それだけ王羲之を勉強するからなんです。

全部、基本が王羲之なんです。

瀬川 そうです。その後の書は、ずっとどこかで王羲之の遺伝子のようなものを受け継いでいるんです。特に唐の初めの頃の皇帝、太宗が王羲之の書が大好きで、それを大事にしたので、臣下もみんな皇帝が好きを勉強しました。それができないと試験にも通らないような流れになったので、基本的に王羲之が置かれて、以後も継承され

ていったのです。

日本もその頃、例えば空海などが唐に留学して、王羲之風の書を勉強して帰ってくると、優れた書家として知られるようになります。その書風が受け継がれていきました。

日本で書の名人といえは空海ですから、その源流にあたる王羲之はまさに原点なんです。ですが、実際に本人が書いた作品は残っていないとか。

瀬川 はい。現在あるものは全部写しで写したものですら国宝になっています。今回出品する「孔侍中帖」は唐代でも古い7～8世紀の頃につくられたもので、それが日本に渡り、おそらく正倉院に入っていたというような経緯をたどっています。その流れだけでも非常に歴史的背景を持った史料ということになります。

そもそも本人の肉筆が残っていないので、推測する以外にないのですが、今に伝わる写しの中でも特によく写されていると評価されている作品です。

所蔵している公益財団法人前田育徳会（東京都目黒区）は、加賀藩主前田家に伝わった古美術を保存管理しているところで、石川県立美術館や東京国立博物館で公開されることが多く、滋賀県での公開は初めてです。

6月になって館のサイトで「緊急告知！ この秋、国宝王羲之「孔侍中帖」が来ます！」と発表なさっていました。そのぐらい、すごいことなのですね。

※8 王羲之（307～365）中国、東晋の書家。楷書・行書・草書を芸術的に完成させ、「書聖」と称される。

※9 太宗（598～649）中国、唐の第2代皇帝。李世民。官制を整え、均田制・租庸調制・科举制などを確立した名君とされる。

※10 蘇軾（1037～1101）中国、北宋の政治家・文学者。宰相となった王安石の新政に反対して左遷され、諸州の地方官を歴任。

※11 黄庭堅（1045～1105）中国、北宋の詩人・書家。蘇軾の門下の蘇門四学士の一人。後世の江西詩派の祖とされる。

※12 米芾（1051～1107）中国、北宋の書家・画家。書においては、以上の3人と蔡襄で「宋の四大家」と称される。

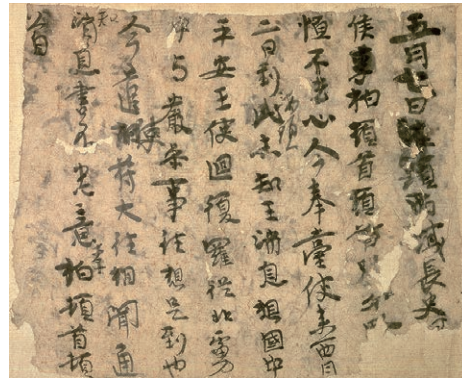
瀬川 王羲之「孔侍中帖」をトップに出していますが、王羲之以外の有名な書家の作品も目玉です。蘇軾「行書李白仙詩」（大阪市立美術館所蔵）、黄庭堅「李太白憶旧遊詩卷」（藤井齊成会有鄰館）、米芾「草書四帖」（大阪市立美術館所蔵）の3点を同時に見ることができま。蘇軾、黄庭堅、米芾の3人は宋の時代を代表する書家です。この3点の作品がそろい踏みするというのは、なかなかないことです。

そのうち2点は大阪市立美術館、1点は藤井有鄰館の所蔵で、滋賀県出身の阿部房次郎と藤井善助のコレクションによるものですから、これらを東近江市で展示する意義というのがあります。

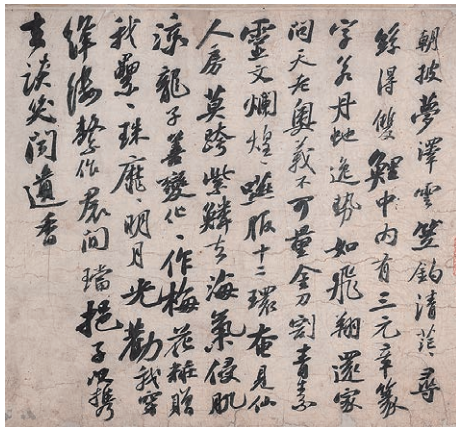
黄庭堅の作品をお借りする藤井有鄰館は、実はなかなか貸していただけません。駄目もとで依頼したのですが、当館のすぐ北に藤井善助邸跡と彦四郎邸がある、つまり創設者の出身地のすぐ近くにあつて、関西中国書画コレクション研究会にも参加している当館だったということ、唐代の「西域出土文書」と一緒に貸しただけのことになりました。

最初の新館10周年のお話で出てきた研

研究会のネットワークが役立ったわけですね。
 瀬川 そうです。もう一つの重要文化財として出品される「李柏尺牘稿」(龍谷大学図書館蔵)は、大谷探検隊という本願寺の大谷光瑞が組織した探検隊が、シルクロードでたまたま発見したという、王羲之と同時代の肉筆史料です。



↑重要文化財「李柏尺牘稿」(B 文書)
 (龍谷大学図書館蔵)



↑重要文化財 蘇軾「行書李白仙詩」(部分)
 (大阪市立美術館蔵)

自然な書きぶりを時空を超えて感じていただきたい

——全体のテーマとしては、自然な書きぶりが垣間見られる下書き(草稿)や特定の相手に向けたプライベートな書を集められたそうですが。

瀬川 作品としてカチッとつくったものというより、自由闊達に書かれたものを中心にしていきます。不特定多数の人に見てもらうために書いたのではなく、個人宛てのよう

なプライベートな作品や、日常で書かれたものを集めています。「見せてやるぞ」という感じで肩に力が入ったようなものとは、少し趣の違うものをご覧いただけます。清代の比較的新しい作品は当館のテリトリーにあたるので館蔵品を出しますが、「冊」と呼ぶ本のような形態になっているものなど、ご覧いただく機会の少ない品もふくまれています。

——その手紙の内容にあたる部分も解説はありますか。
 瀬川 字起こししたものは図録に入れるつ

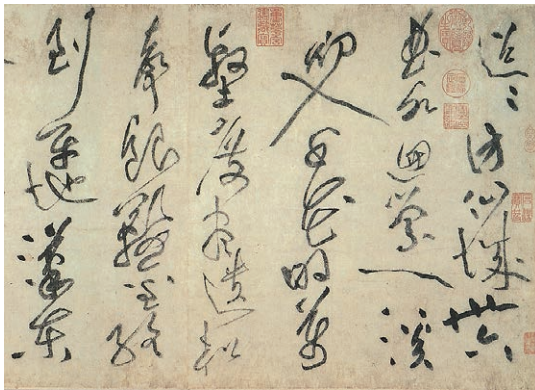
もりですが、あくまで「書」ですので、内容から見えてしまうと、書かれている字面に神経が行かなくなってしまうと思います。まずは素直に筆の運びを目で追ってもらうほうがよいと思います。

——確かにそうですが、それはある程度素養がある人にしかならないのでは。

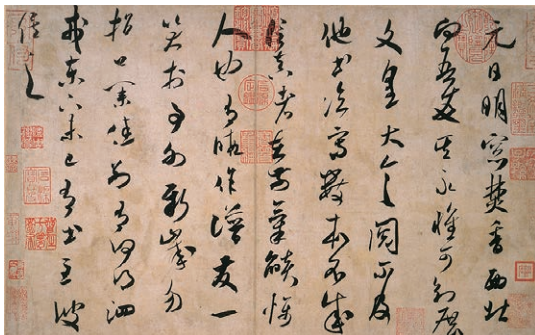
瀬川 「見方」がわからないと感じて、最初から書というものにアレルギーを持っている方もあると思います。私自身がそもそも書の出身ではなく、中国史の研究から入っていますので、その気持ちもよくわかるのですが。

今から1000年以上前に生きていた人間がわれわれと同じように手を動かして書いたものだから、それを時空を超えて感じ取る行為に、書道の経験がない方も挑戦していただければと思います。

——本日は興味深いお話をありがとうございました。
 (2025.6.27)



↑黄庭堅「李太白憶旧遊詩卷」(部分)
 (藤井齊成会有鄰館蔵)



↑重要文化財 米芾「草書四帖」のうち「元日帖」
 (大阪市立美術館蔵)

『敏満寺村御用書留帳』

村方文書にみる

江戸時代庶民のくらし』

発行 敏満寺古文書研究会 〈滋賀県多賀町〉

残されたマイクロフィルムから

古文書を解読

多賀町敏満寺の敏満寺古文書研究会の皆さん（小菅一彦さん、谷川利治さん、竹内秀雄さん、種村貞彦さん）によって、江戸時代の村方文書が翻刻され、読み下し文、現代語訳もつけた書籍が刊行されました。

本書刊行のきっかけは、昭和51年（1976）に敏満寺公民館が編集・発行した『敏満寺史』に掲載されていた古文書に興味をもった小菅一彦さんが、許可を得て当時区長室に保管されていた古文書をマイクロフィルムに撮影したことです（もとの古文書は現在、所在不明）。小菅さん宅での定例古文書読解の勉強会で、マイクロフィルムをもとに江戸時代中期（1746～1749）の奉行所宛の文書を翻刻する作業を始め、より多くの人に読んでもらえるよう

現代語訳と当時の生活に関する注釈なども加えていきました。

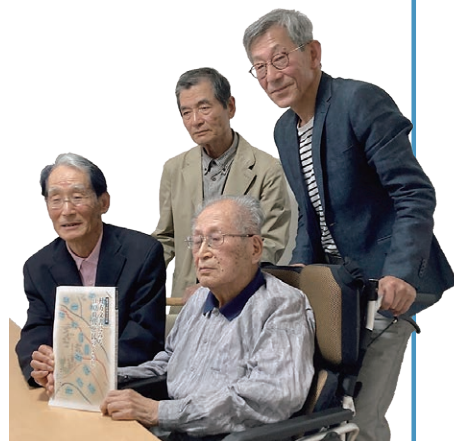
垣間見える

庶民の暮らしぶり

古文書の内容の多くは、結婚、離婚、養子などによる村の住人の出入りを奉行所や相手側の村へ願ひ出たものです。なかには高宮村に奉公に行っていた半七の妹くらが、里帰りの一泊後、実家を出たものの奉公先へ帰らず行方不明であるといった事件性を感じさせるものもあります。

源六の娘ろくは八朔（旧暦8月1日）の縁日に多賀大社へ参拝したところ、贅沢品として禁止令が出ていた絹の帯を締めていたことを村役人に通報され、親子ともども謹慎処分となりました。村の領内に多数のイノシシやシカが現れ、収穫前の作物を食い荒らすので、以前と同様、村内の平七に鉄砲を

使う猟師の許可を与えてくださいという奉行所への願いもあります。こうした江戸時代の農村の暮らしぶりの一端を垣間見ることができるとなっています。



小菅一彦さん（前列右）、谷川利治さん（前列左）、竹内秀雄さん（後列右）、種村貞彦さん（後列左）



A4判・180頁

希望者には敏満寺公民館で配布

お問い合わせ先 携帯 080-1400-1512（谷川さん）

価格：無料 ※送付希望の場合、送料は申込者負担



き物づくりの歴史の実像に迫ります。

入館料：大人660円、大学生400円

休館日：月曜日（月曜日が祝日・休日の場合は翌日）

■企画展関連シンポジウム

「なぜ紫香樂で大仏を造り始め頓挫したのか—聖武天皇と紫香樂宮—」

8月9日(土) 13:00～17:00

基調講演「聖武天皇にとって紫香樂宮とは？」

講師：神野恵 氏（奈良文化財研究所）

基調報告①「史跡紫香樂宮跡の発掘調査1」

講師：小谷徳彦 氏（甲賀市教育委員会）

基調報告②「史跡紫香樂宮跡の発掘調査2」

講師：大道和人（当館学芸員）

基調報告③「なぜ紫香樂か？」

講師：細川修平 氏（滋賀県文化スポーツ部）

討論・ギャラリートーク

会場：当館セミナールーム 定員：120名（先着順） 参加費：1000円（資料代・入館料）

■企画展関連講座

「甲賀の焼き物の歴史」

8月30日(土) 13:30～15:00

講師：伊藤航貴氏（甲賀市教育委員会）

会場：当館セミナールーム 定員：120名（先着順） 参加費：500円（資料代）

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

企画展示 いずみ 曳山大工 藤岡和泉 —曳山の基は仏壇にあった—

開催中～9月28日(日)

長浜曳山博物館



貞享2年作と伝わる和泉壇

江戸時代から長浜を代表する大工一門であった藤岡家は、全国的に見ても独創的な舞台付曳山型を生み出すとともに、「和泉壇」と呼ばれる大型仏壇を創出し、仏壇産地・長浜でも最高級ブランドとして人気を

折れや傷みの修理をおこないました。本展では、修理後の絵日記188日分のすべてと関連資料を展示し、戦時下の学校生活と子どもたちの暮らしを紹介します。

入館料：一般 500 円、高大生 300 円、小中生 200 円
休館日：月曜日（祝日の場合は開館し、翌平日休館）、8月8日午後（びわ湖大花火大会当日）

■スライドトーク

8月7日(木)・13日(水)・28日(木)

14:00～(40分程度)

会場：1階講堂 定員：100名

参加費：無料（当日有効の企画展観覧券が必要）

■れきはく講座

「戦時下の暮らし～滋賀県平和祈念館の資料をとおして～」

8月10日(日) 14:00～15:30

講師：日高昭子 氏（滋賀県平和祈念館学芸員）

「歴博の戦時資料にみる「大津と戦争」付：パンキン爆弾と大津」

8月16日(土) 14:00～15:30

講師：樋爪修 氏（元大津市歴史博物館長）

会場：1階講堂 定員：100名（申し込み多数の場合、抽選） 参加費：各回500円

申込方法：当館サイトの「講座・講演会情報」ページからお申し込みください。

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

第70回企画展

紫香樂と信楽

—宮の造営と焼き物の歴史—

開催中～9月23日(火・祝)

滋賀県立安土城考古博物館

奈良時代に聖武天皇は信楽の地に紫香樂宮を造営し、その700年後、信楽は茶の湯の焼物の地として名を馳せます。この二つのシガラキの名は、なぜこの地に誕生したのでしょうか？ 発掘された考古資料、縄文時代～安土・桃山時代の「焼き物」を積極的に用いて、紫香樂宮の全体像と、信楽の焼



阿弥陀寺古墓 壺（当館蔵）

物

夏季企画展 没後30年 原田観峰の書法展

開催中～9月15日(月・祝)

観峰館

今年度、観峰館は開館30周年を迎えると同時に、創設者・原田観峰の没後30年に当たります。本展では原田観峰の教育者としての肉筆手本と、書家としての作品という二つの面から、日本習字の原点に迫ります。

入館料：一般1000円、高校生・学生800円
休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）

■関連イベント

土曜講座「原田観峰の書と未来」

8月30日(土) 13:30～14:30

講師：古橋慶三（当館学芸員）

定員：20名（要予約） 参加費：入館料で参加可
オンライン配信あり 定員：30名（要予約）

お申込者に視聴 URL をお送りします。

お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 4141



原田観峰「まるチョン」（制作年不詳、当館蔵）

第97回企画展

瀬田国民学校絵日記

—戦時下の学校生活と子どもたち—

開催中～8月31日(日)

大津市歴史博物館



昭和19年11月2日
「瀬田国民学校絵日記」（当館蔵）

太平洋戦争が激しさを増した時期の貴重な記録とされる「瀬田国民学校絵日記」（大津市指定文化財）は、令和5年度に本紙の

THE BANK LIBRARY オープン!

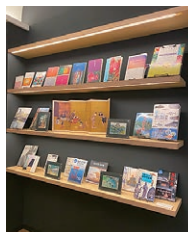
夢京橋キャッスルロードの江戸時代の城下町をイメージした銀行が、飲食複合宿泊施設「THE BANK HATAGO HIKONE」としてリニューアルオープンしました。

2階が宿泊施設、1階はビザ専門店やバー、テイクアウトのショップのほか銀行の金庫が生まれ変わった「THE BANK LIBRARY」があります。

「THE BANK LIBRARY」では、サンライズ出版の創業者・岩根豊秀の孔版画の作品や書籍を展示。

テイクアウトショップ ENNE では書籍や岩根豊秀のポストカードを販売しています。

THE BANK HATAGO HIKONE 彦根市本町二丁目4-23
アクセス：JR彦根駅から徒歩20分



岩根豊秀 作 彦根城の孔版画 ポストカード

新商品 7枚組 990円(税込)



THE BANK HATAGO HIKONE ほか
彦根市内の店舗で限定販売

BOOKS 図書館巡回展

わたしのまちの自費出版



展示風景
守山市立図書館での

県内の図書館で、滋賀県ゆかりの自費出版物を展示します。あわせて「日本自費出版文化賞」の受賞・入選作品も展示しています。

※手に取ってご覧いただけます。館の所蔵図書のみ貸し出し可能です。

9月25日(木)～10月24日(金)

甲南図書交流館 (JR甲南駅から徒歩約5分)

開館時間：10:00～18:00 休館日：月・火曜・10/22(木)

記念講演会

甲賀市郷土資料室「忍」オープン1周年記念
末裔が語る 家康と甲賀忍者

9月27日(土) 14:00～15:30 (開場13:30)

講師：太伴原甲賀 (『家康と甲賀忍者 大原一族』著者)

会場：甲南図書交流館 視聴覚ホール

料金：無料 定員：70名 (先着順)

申込み：右のQRコードから申込み

8月16日(土)受付開始

主催：問合せ：甲賀市図書館 TEL.0748 (86) 1504

共催：淡海文化を育てる会



関連フェア 平和書店 アル・プラザ彦根店
開催中 「夏」の思い出 わたしのまちの自費出版

堰堤など)をつくってきました。

江戸時代から明治にかけての災害状況や土木工事計画の地図、治水に関わる道具や文書などを展示するとともに、古い地図から地域の歴史を探る方法を紹介します。

料金：大人340円、小中学生170円

※上記料金+常設展示の観覧料金がかかります

休館日：月曜日・9月2日～5日

※祝日・休日と8月4・11・18日、9月22日は開館

お問い合わせ先：TEL 077 (568) 4811

開館30周年特別企画展

おうきし 王羲之からの手紙

10月1日(水)～10月26日(日)

観峰館

書聖・王羲之の書風をよく伝える国宝「孔侍中帖」を中心に、筆者の

自然な書きぶりが垣間見られる下書き(草稿)作品、

特定の相手を対象にして書かれたプライベートな書など中国の名筆を中心に展示し、その書かれた背景や、多様な書きぶりから作品の持つ魅力に迫ります。

入館料：一般1800円、学生1200円、高校生700円、中学生以下無料

会期中の休館日：なし

お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 4141



↑国宝「孔侍中帖」の画像は、当館サイトでご覧いただけます。

博しました。

藤岡家が手掛けた仏壇にスポットをあて、長濱仏壇の歴史やその特徴を紹介します。

料金：大人600円、小中学生300円

休館日：月曜日(ただし、祝日の8月11日/月)・9月15日(月)は開館、翌日の8月12日(火)・9月16日(火)は休館

■展示説明会

8月9日(土) 13:30～

案内：岩田澤奈(当館学芸員)

会場：1階展示室 参加費：要入館料

■講演会「藤岡和泉と長浜仏壇」

8月23日(土) 13:30～

①「藤岡和泉と濱仏壇」

講師：坂口泰章氏(長浜城歴史博物館)

②「江戸時代の木工のなかの藤岡和泉」

講師：太田浩司(当館館長)

会場：当館 伝承スタジオ (要予約)

聴講費：500円(資料代)

お申し込み先：TEL 0749 (65) 3300

第33回企画展示

川を描く、川をつくる

—古地図で昔の堤をさぐる—

開催中～11月24日(月・祝)

滋賀県立琵琶湖博物館

滋賀県(近江国)は日本国内でも有数の「天井川」が多い地域で、「はげ山」と呼ばれる草木の少ない山々が広がっていた歴史があります。そして、人々は水害・土砂災害から地域を守るため、「堤」(堤防や

別冊淡海文庫29

石塔寺と石造三重塔

あいくおう
平安時代に建てられた阿育王塔

大塚活美 著

B6判並製本 総208頁 1980円(税込)

石塔寺の歴史と石造三重塔の研究史の双方をたどり、百済からの渡来人の子孫が奈良時代に建立したとする長く有力視されてきた説を検証。



散策 京都南山城の文学碑

小西 亘 著

四六判並製本 総232頁 2200円(税込)

文学碑に刻まれた詩歌を読めば、地域に関わる文学作品や風土を知ることができる。奈良と京都に挟まれた丘陵・南山城(井手町・宇治田原町・城陽市・京田辺市・相楽郡)の約130基を案内。



綺麗さびの茶人 小堀遠州

ようの
丁野永正 著

四六判上製本 総280頁 頒価1500円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25(著者)

江戸幕府の作事奉行として後世に残る大きな働きをしつつ、茶人としても太平の世にふさわしい「大名茶」を完成した小堀遠州(政一)の生涯を小説仕立てで紹介。(2025.5.15刊)



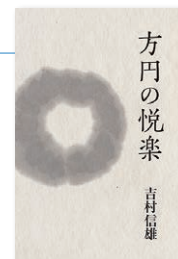
方円の悦楽

吉村信雄 著

四六判並製本 総156頁 非売品

問合先 近江八幡市多賀町668(吉村順子)

滋賀県職員囲碁サークルの創設時からの主要メンバーであった著者(令和5年没)が、会報に寄稿したエッセイやプロ棋士による指導碁の棋譜入り戦記を遺族とメンバーがまとめた。(2025.7.15刊)



アンケートのお願い

Duet をより良い情報誌にしていけるために、ぜひ皆さまの率直なご意見・ご感想をお聞かせください。



インターネットでDuetが楽しみたいだけです

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

琵琶湖エレジー

安部良典 著

四六判並製本 総228頁 1980円(税込)

東京を離れ彦根に降り立った主人公は何を見たのか。暗くなるまで待って、近江鉄道、学生運動、リルケ、芥川龍之介、ふなずし……。『昭和』×『文学』×『滋賀』が交錯する短篇小説集。



SHODÔ MONDÔ

Japanese Calligraphy Q & A

文珠松崖 著

A5判並製本 総80頁 2750円(税込)

Q&A形式で、日本の書道、使用する道具などを英語で語る外国人のための書道入門書。400年の歴史を有する雲平筆の作り方や、成田紙工房の和紙製造工程などもあわせて紹介。



びんまん、し

敏満寺村御用書留帳

村方文書にみる江戸時代庶民のくらし

敏満寺古文書研究会 発行

B5判並製本 総180頁 非売品

問合先 携帯 080-1400-1512(谷川)

公民館に保存されていた江戸時代中期の庄屋が奉行所にあてた文書3年分を解説。翻刻文、読み下し文、現代文をつけた。(2025.4.21刊)



堅田の歴史と魅力

原始・古代から現代(平成)まで

村内一夫 著

B5判並製本 総232頁 非売品

問合先 サンライズ出版 (0749-22-0627)

琵琶湖水運の拠点であり、中世には自治都市として栄えた大津市堅田地域の歴史上の出来事100項目をピックアップ、各1ページで紹介。18の歴史散歩コース付き。(2025.6.20刊)



表紙写真 王羲之『集王聖教序』(部分) 黒川古文化研究所蔵

編集後記 観峰館の開館までの経緯などについては、開館20周年の時に取材した本誌117号で古橋学芸員にお話しいただいていますので、右下のQRコードからバックナンバーをご覧ください。もともとは何の縁もなかった旧五個荘町の現在地のすぐ近くに、日本を代表する中国書画コレクターの一人だった藤井善助の生地があったのは、おもしろい縁です。藤井善助といえば、大ヒット中の映画『国宝』のロケ地として知名度の上った旧琵琶湖ホテル(現、びわ湖大津館)の取締役会長も務めています。

